未来への航路

宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長　平川 新（ひらかわ あらた）

④宮城県北部地震と河南町のレスキュー

宮城資料ネットの結成

地震で石巻と関係を持ったのは、2003年7月26日に発生した宮城県北部地震からです。8月1日に河南町の被災調査に入り、その後チームを組んで古文書など歴史資料の保全活動を始めました。河南町のほか、被害の激しかった鳴瀬町、矢本町、南郷町、鹿島台町にも入りました。各町での調査・保全活動には、毎回20人程度の歴史関係者や学生たちが参加してくれました。5町で合計192軒の旧家を訪問しています。その年の11月まで、この活動は続きました。

歴史関係者が被災地に入るのは、災害を機に旧家に残されている古文書が廃棄されたり、散逸したりすることがあるからです。武士の子孫の家には由緒書や領地文書、江戸時代に村役人を務めた家には村の行政文書や、その家の経営文書が残されていることがあります。村役人文書は土蔵に納められていることが多いのですが、地震の揺れで土蔵が傾いたり壁が落ちたりしますと、修復費用がかかります。漆喰壁であれば数百万円もかかるとのことですので、多くの場合、解体するしかないのです。

河南町の旧家に残されていた古文書

斎藤家の土蔵から古文書箱を運び出すメンバー

100年から200年もの間、土蔵に眠り続けていた古文書は紙喰い虫にやられてボロボロになっていたり、収納した箱はネズミの巣になっていたりすることがあります。しかもくずし字で書かれた古文書は、読むことがむずかしいのです。伊達政宗の書状など、著名人の史料であれば床の間に飾って大事にされるのですが、ほこりまみれの古文書はガラクタと一緒に処分されてしまうことがあります。

ところがその古文書こそが、地域の歴史を明らかにする大事な記録なのです。私たちはこの北部地震を機に、旧家に残されている古文書を救済し保全するために、NPO法人宮城歴史資料ネットワーク（宮城資料ネット）を結成しました。古文書を守る活動は現在も続いています。

前谷地の斎藤家

河南町の「斎善」こと斎藤家は、江戸時代後期から地主として成長し、戦後の農地解放前には、酒田の本間家に次ぐ全国で2番目の大地主でした。その斎藤家から宮城県文化財課に、北部地震で建物が損壊したとの情報があり、宮城資料ネットのメンバーがレスキューに向かいました。

母屋も土蔵もかなり壊れており、蔵の中にあった大量の文書箱も散乱していました。雨漏りも激しく、濡れるのを避けるため別棟に文書箱を移し、整理作業を行いました。

10万点を超える古文書には、地主史料のほかに漁業、鉱山、鉄道、銀行など多方面にわたる投資・経営関係史料が大量にありました。日本資本主義の成立過程を解明し、日本近代化の道筋を研究することが可能な、大変貴重な史料群でした。

何度も通って整理する私たちの姿を見て、ご当主の斎藤武子さんは、「そんなに大事な記録なの？」と驚いておられました。斎藤さんは膨大な史料がこれまで埋もれてきたことを惜しまれ、歴史研究の役に立てばと東北大学図書館に寄贈を申し出られたのです。受け入れた図書館では、史料目録を作成し公開しています。

2005年、斎藤氏庭園は国の名勝に指定され、石巻市が管理しています。大富豪の栄華の跡を偲ぶことができるお屋敷です。

（次回は11月20）

ひらかわ・あらた
昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26―31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。